

ビブリオエッセー

産経新聞 令和2年(2020年)3月30日(月)

三重県伊賀市 實守あかね (20)

【心理試験】

江戸川乱歩(春陽堂書店・江戸川乱歩文庫)

2020.3.30

姉がこの本をすすめてきたのは、私が高校二年の春ごろだった。私はそれまで、文庫を買って読む習慣はまったくといっていいほどなかった。買って読むのは漫画ばかり。しかし、タイトルが気になって読んでみたという姉からすすめられたその本を何となく気になり、読んでみた。

江戸川乱歩の短編集だ。名前だけは知っていた(後で知ったが乱歩は私の住んでいる市の隣の市「名張市」出身である)。表題作の内容は名探偵、明智小五郎が言葉を巧みに操りながら殺人事件の犯人を追いつめていく、いたって普通の三人称小説だった。

のだが、この小説、探偵・推理ものの初心者の中には驚きだった。推理小説とは読者が物語を読み進め、読者自身も犯人を推理しながら物語の終盤でようやく犯人が割れる、

昔の探偵小説が魅力だ

というようなものだと思っていたからだ。ところが『心理試験』は違った。

序盤も序盤、読み始めからもう犯人が分かってしまう。最初から分かってしまうなんておもしろくない!と思う人もいるだろうが、分かった上で探偵や警察がどのように犯人を追いつめていくか、ワクワクしながら読んだ。『心理試験』というタイトルにも納得できた。

そんな十分に魅力的な乱歩の小説が私を読書の道へ導いてくれた。その後も『人間椅子』や『黒蜥蜴』や、乱歩作品を読んだが、まことにささやかな、気になっている部分がある。男性の登場人物たちの話し言葉が時として「さかしら」と少し婦人めいた口調になるのだ。現代小説にはない古めかしさなのだろうが、なぜかハマっている。

※無断転載不可